

お泊まりデイ 3年滞在

職員複雑「応じたくないが…」

通所介護施設

事故が多発している実態が読売新聞の調査で判明した宿泊サービス付きの通所介護事業所、いわゆる「お泊まりデイ」には、「ロング」と呼ばれる長期宿泊者も少なくない。日帰りが前提のデイサービス施設で日々寝泊まりするお年寄りの姿は、少子高齢化に伴う家庭の介護力低下や入所施設不足など、高齢者を取り巻く現実を映し出す。大阪の施設を訪ねた。(松永喜代文)

市街地外れの住宅街にある。宿直職員は1人。料金は夕食と朝食込みで1泊1ふすまで仕切られた7畳と6畳の和室で、多い日には男女各3人が布団で宿泊する。宿直職員は1人。料金は夕食と朝食込みで1泊1ふすまで仕切られた7畳と6畳の和室で、多い日には男女各3人が布団で宿泊する。宿直職員は1人。料金は夕食と朝食込みで1泊1ふすまで仕切られた7畳と6畳の和室で、多い日には男女各3人が布団で宿泊する。



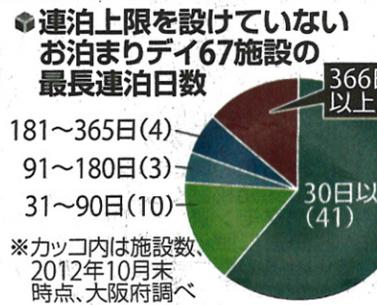
お泊まりデイのベッドで休むお年寄り。高齢者の受け皿不足を物語る(大阪府内) 岩波友紀撮影

は、3年以上連泊する。認知症が進んで徘徊するなど、独居生活が困難になり、デイサービスに来ていたことが暮らしようになった。唯一の肉親である娘は結婚後、遠方で暮らし、月1回面会に来る。職員らは、特別養護老人ホームへの入所を何度か勧めたが、「待機者が多くて順番待ちになる。ここには馴染んでいる」と返され、それ以上は踏み込めなかったという。

別の80歳代の女性も連泊が約3年になる。以前は娘夫婦と同居。仕事を持つ娘が在宅で介護し、宿泊は週1、2泊程度だったが、回

大阪府9施設 連泊1年超す

大阪府が府内の通所介護事業所に行ったアンケート調査結果によると、2012年10月時点で宿泊サービスを実施しているのは167施設。連泊の上限日数を



設けていない67施設のうち、26施設には31日以上連泊者があり、うち9施設は1年を超えていた。

数は次第に増え、「他に施設が見つからない」と、やがて預けつ放しになった。女性も認知症を患い、自分の言動や周りの出来事を忘れてしまう。デイサービスの利用者が帰る夕方になると「家に帰りたい」と言い出す。職員が「あした帰

れるから」とその場を取り繕い、何とかなだめる。職員の心境は複雑だ。核家族化で子は自分の生活が中心になり、あるいは仕事で余裕をなくし、親の介護すべてを任せてしまっている。本当はここまで応じたくはない。親子の距離がど

特養不足 自宅介護も困難

お泊まりデイは本来、家族の急用時などに一時的に高齢者を引き受けるのが目的だ。長期宿泊の背景には、特別養護老人ホーム(特養)などの受け皿が慢性的に不足している現実がある。

9年末時点で約42万人。同省は重度者の入居を優先するため、15年度以降、新規入所を認める要介護度を現行の「1以上」から「3以上」に引き上げる考えで、行き場を失う高齢者がさらに増える恐れもある。少子高齢化や核家族化で家族構成が変化していることも影響している。

要介護認定を受けた人の数は、介護保険が始まった00年は218万人だった。が、昨年4月には564万人に。高齢者が息子や娘と同居している割合は、12年は42%と30年前の1982年(68%)と比べて26%も下落し、独居や高齢夫婦のみ世帯が増えた。同居家族がいても共働きで、居間は一人という「日中独居」のケースもある。家庭での介護の担い手は減る一方だ。

大阪府が2012年9月に作った運営基準では、連泊は原則30泊まで。しかし、宿泊サービスは介護保険外で施設側が自主的に行っているため、強制力はない。長期宿泊は減少傾向にあるとみられるが、基準に翻弄される施設もある。

府内の別の施設は昨年秋、30連泊したお年寄りに他の福祉施設で数日間過ごしてもらった後、再び受け入れることにした。連泊日数をリセットするためだ。パーティションで仕切った大部屋と個室には計9床のベッドがあり、連日ほぼ満床。「30泊」が迫ったお年寄りに外泊を伝えると、「どこに行くの?」と、決まって不安な表情になる。施設の管理者は「基準の狙いは帰宅を促すことだが、自宅では受け入れられない現実がある。環境の変化は心身に負担をかけるだけ、割り切れないでいる。大阪市内の施設は昨年、

長期の受け入れをやめた。転機になったのは、3年以上連泊した70歳代の末期が人の男性をみとったこと。妻もがんを患い、息子は仕事で忙しく、この施設だけを頼りにしていた。施設の職員は「家族から男性を奪ったのではないか」との思いは消えない。お泊まりデイが便利な存在になればなるほど不幸なお年寄りを増やすのでは、と自問している」と明かした。